

は前は船大工で、若い頃は長崎で大きな黒船を造っていたと云う。その人が今は年老いて、おとし舟の船頭をしてその日その日を送っている。独歩はこゝ老人の身の上に思いを寄せ、同情して色々と思像している。そしてこの老翁の一生は物語を生み出すものになると思う。回想すると、一昨日の元越の十二段登りは一つの詩であつた。美しい自然とそれに調和する人間を見た。この美しい配合は、自分の胸の中に色々と思像を生じさせて、満足したうれしさを記してある。

八月

秋雲、十二段の峰をかすめて四面の風物暗憐たる色ありけり。雨終に降り米りぬ。されど今已に止みて天何時の間にか晴れ、満空の星彩いとしほおきらかなり。

本日は水曜日も。祈禱会に出づ。校務に従ふは常の如し。

吾が此頃の境遇は決して幸福なりと言ふ可からず。併し、美なる自然に接し、目新らしき生活を見て大に得る延あるに相違なけれども。校務の爲めに専ら文書者としての天職の爲めに、十分勉勵用意するのひま少なき事は吾に取りて尤も不幸と言はざる可からず。心はあせれども暇なきを如何せん。されどこの不幸らしく見ゆる者も神は必ず吾が爲に結極・幸なる事ならしめ給ふと信ずるが故に、只だ吾は努む丈けを勉むるの外あらじ。

秋雲が立ちこめて雨が降り出したが、夜には入って雨は晴れ、今は満天に星が輝いている。自分の境遇を省みて、今の自分は決して幸福ではない。美しい佐伯の自然に接し、目新しい人々の生活を見て、大いに得るところ

があり、詩表(しう)を肥やしているが、校務に追われ、自分の天職と決めてある文書者としての勉強が出来ないからである。心はあせるが暇がなくどうしようもない。しかし、神はきつと救ってくださるに違いない。今の自分は教師として務めるだけ務める覚悟であると心に期している。

(つづく)

研究

「今宮さま」の木像について

（青山・黒沢の富辰神社の撰社）

会員 佐 脇 賢 一

去る三月二十五日、佐伯史談会は佐伯散歩会と共に龍蔵・黒沢・東光庵の觀櫻をかねて、青山地区の史跡めぐりを行なった。私も久しぶりの黒沢行きとて、喜んでお供をさせてもらった。

さて、一行は黒沢に着くと、まず富辰神社に参拝したが、私はここで一つの大きな收穫をした。それは御本殿の向つて右側にある境内撰社「今宮さま」についてであるが、この富辰神社には、これまで度々参拝してはいるが、撰社「今宮さま」の木像については考察することがなかった。

この日、同行した矢田清氏とともに「今宮さま」の木像を観察したが、矢田氏は木像の型状・彩色・塗料などから、この製作年代が室町時代と推定された。素朴というか、稚拙というか、どう見ても専門仏師の作ではないが、古色蒼然たるものがある。

木像は神像か、仏像か定かでないが、「今宮さま」と

よばれてゐるから神像をもうというのか、部落古老の説である。像容は空冠をかぶり、袈裟をつけているが、どうも女人像のようである。私ははじめ佐伯地方で「火防ぎの地蔵」として祀る、隈軍地蔵(隈軍地蔵)ではないかと思つた。しかし、像容は隈軍地蔵よりむしろ観音菩薩に近い。ともあれ富尾神社は神仏習合の祭祀がなされた神社である。境内摂社の御神体木像が仏像であつてもおかしくはない。

そこで私は「今宮さま」という神号にひつかつた。「今宮」とは、解によると「ある神靈を分祀した社祠」である。この富尾神社は、佐伯地方の富尾神社の宗社(本宮)であるが、明治初年神仏分離の布告がでるまでは、富尾大権現、あるいは富尾三社大権現として崇拝され、神仏混淆の祭祀が行なわれた。

馬上に水袋をせし黒沢の弥四郎の娘若狭は、惟治の神霊を移り、地を走り水を歩むことおたかも平地を行くが如し、(若狭)父に向ひ「汝我を知らずぬ、佐伯惟治なり」と。村中の教輩みな驚きて、手をつき膝を屈して「いかなる御事にて御越し候哉」と訊ぬれば、「我旅れに水を乞ひたるとき、若狭に一言残すといへども、我婦城せずして空となる。されば水の返答をいひ知らずなり。汝等いまより後、若狭を崇めて所々長とも思ふべし。此黒沢の地に我霊魂を祭り、宮地に馬居を建て清浄に致すべし。若し疑心を生ぜば村を退散さすべし」と託ありて、若狭絶息して倒れける。総身汗となりて、三日の間人心なかりき。

(梅牟礼実録より)

こうした縁起によつて富尾大権現社は創祀されたが、当初は定光(神霊の憑依者となつた若狭)の宮となり、富尾神に仕えたが祭り、定光寺(富尾大権現と号した)が

天文七年(一五三八)多田休四郎が、時の梅牟礼城主(惟勝)に怨霊怪異のことと訴え、その援助をうけて富尾大権現社を建造したという。

富尾権現はまた富尾三社権現といわれるが、この三社とは何であるか。一級別には惟治の怨霊である富尾神と姫岳明神、それに熊野権現を合祀しているが、なかには惟治・千代鶴父子の霊と姫岳明神、あるいは梅の宮へ佐伯惟勝の長子梅千代(俗説)を合祀する。えつとも明治初年の大教宣布以来、権現信仰に代つて祭神として大正貴神・少彦名神が登場、富尾神社の主神に加つた。とあるが、問題は黒沢・富尾神社の境内摂社「今宮さま」であるが、これは本宮の祭神ではない。さうして本地垂迹説による仏菩薩としないし、祭祀の縁起もわかつていない。

しかし、富尾神の祭祀が定光尼によつて創始されたこととすると、当然、神霊の憑依者である定光尼の姿をうつした木像ではなからうか。「今宮さま」という神名も、本宮の神霊の分霊(憑依者)と解することができる。また製作推定年代が、室町時代末期とすればなおさらである。

(おわり)

誌上演習

(これは今日ふたぎ)

出題 判 察

(設問) 某日わが家の古書を調査したところ、中に「遷後年四月の面風はけししがやと次の通り読んだ。さて□か文字四字はどうか読んだらよいか。

元□□乙年閏□月十六日

元文なら二四〇年程前、幕府様で元禄ではない。さて右の四か所を適正にらべて埋めて見てほしい。(解は本号のどこかある)

※ 閏月、改元月の一覽年表あり、希望者にさし上げる。